

大分市（大分県）

【自治体のあらまし】

大分市は、縄文時代から現在まで、瀬戸内ルートを主幹とした「海の道」を媒介に歴史を刻んだ東九州の要地であり、1300年にわたり、地理的にも歴史的にも県都として大きな役割を担ってきた。中世・戦国時代には、北部九州6国を治めた戦国大名大友宗麟の下に隆盛をきわめ、最盛期には世界にも名が知られる国際貿易都市「豊後府内」となった。これに伴い、西洋の医術、音楽、演劇などを取り入れ、我が国独自の「南蛮文化」が全国に先駆け大きく花開いた。さらに、高度経済成長期には、臨海部を拠点に新産業都市として、鉄鋼、石油化学、銅の精錬など重化学工業を中心に発展を遂げ、近年ではIT関連企業が進出するなど様々な産業が集積している。

人口 479,446人（平成29年2月28日現在）

【文化芸術創造都市への代表的な取組】

平成26年6月に「大分市文化・芸術振興計画（2020わくわく大分 文化・芸術ゆめプラン）」を策定。この計画は、「人とまち文化・芸術で輝く大分市」を基本理念とし、3つの基本目標（「心豊かな市民生活を実現する文化・芸術の振興」、「郷土を愛する心や一体感を醸成する文化・芸術の振興」、「賑わいを創出し地域経済を活性化させる文化・芸術の振興」）を掲げ、その実現に向けて4つの施策の方向性（「したしむ」、「はぐくむ」、「ささえる」、「つなぐ」）を示し、各種事業に取り組んでいる。

平成25年に開館した新たな文化・芸術拠点「ホルトホール大分」において人材育成や交流促進を推進するとともに、「おおいたトイレナーレ」、「宝のまち・豊後FUNAI芸術祭」、「おおいた夢色音楽プロジェクト」など多様な文化芸術イベントを展開している。

●アートを活かしたまちづくり事業「おおいたトイレナーレ2015」

アートの持つ創造性を地域活性化や産業振興に活かす取組として平成27（2015）年度に「トイレナーレ」を開催。

「トイレナーレ」とは、3年に一度開催されるアートフェスティバルを指す「トリエンナーレ」と、街中の空間に欠かせない「トイレ」を組み合わせた造語であり、「アートを活かしたまちづくり」を目指し、トイレのみを舞台・テーマとした作品を展示した。

「まちなかアートイベント」や「まちなか体験イベ



トイレナーレ 2015 作品：

メルティング・ドリーム

ント」等，作品を見ながらまちを巡ってもらうための様々な取組を行い，訪れる人々に驚きや感動を提供した。来場者数は18万人を数え，経済波及効果も4億円以上と算出されている。

●ホルトホール大分

市民が集い，学び，憩い，賑^{にぎ}わい，交流する情報文化の中核施設として，平成25年にJR大分駅の南側に開館した。施設内部に市民ホールや図書館，会議室，子育て交流センター等を有し，文化，福祉，健康，教育，情報，産業，交流にぎわいの7つの機能を備えた多機能型複合施設である。

周辺にはグランシアタ，大分市美術館等が集積しており，それらの周辺施設とも機能連携し，中心市街地の活性化を図りながら，人材育成や交流促進といった多彩な事業を展開している。



ホルトホール大分

●おおいた夢色音楽プロジェクト

「おおいた夢色音楽プロジェクト」は，「おおいた夢色音楽祭」，「ふるさとコンサート」，「どこでもコンサート」，「いかした大人たちのバンドフェス」というコンセプトが異なる4つの事業により，日本における西洋音楽発祥の地といわれる大分市において，年間を通して音楽があふれる「音楽のまち大分」を実現するため，鑑賞・参加・育成型の音楽イベントを開催。

「おおいた夢色音楽祭」は平成28年に9回目の開催を迎え，大分市の秋の風物詩となっている。大分駅周辺や大分市中心市街地の各商店街，公園など，まちなかのストリートステージで，県内外から集まった1,000人を超えるミュージシャンが演奏を繰り広げている。



おおいた夢色音楽祭 2016の様子

●宝のまち・豊後FUNAI芸術祭

「宝のまち・豊後FUNAI芸術祭」は，16世紀半ば日本でいち早く「南蛮文化」が花開いた大分市の歴史・文化的資源に光を当て，文化・芸術の持つ創造性を地域活性化に活かすことを目的に平成27年度から開催。

大分市の文化施設各館（ホルトホール大分・コンパルホール・平和市民公園能楽堂）の持つ特性を活かした公演や催しを行う「ホール事業」や，中心市街地でのにぎわい創出を目的とした文化・芸術イベントを行う「にぎわい事業」を実施している。



ホール事業(左)とにぎわい事業(右)の様子